

第6章 文化資源の保存・活用に関する課題と方針

1 文化資源の保存・活用に関する現状と課題

(1) 調査・把握に係る現状と課題

備前市では、第2章で概要を記したように、これまで様々な文化資源把握調査が行われ、成果を上げていますが、産業遺産を含む建造物、古文書、動物、地質鉱物、保存技術、民俗など特定の分野で基礎的な調査が行われていません。このことは1市2町が合併して新備前市になって15年以上経過しているのに、指定文化財が統一した基準で加除ができていないことにもつながっています。

平成17(2005)年に合併した備前市・吉永町・日生町のうち、比較的把握が進んでいるといえるのは旧吉永町です。旧吉永町では町史が編纂^{へんさん}されており、多くの文化資源が紹介されています。通史に関連したものが中心で、文化資源の把握が十分なものとはいえませんが、民俗や文献についても詳しく記載されています。旧日生町は、民俗や自然に関しては、シリーズで冊子を刊行するなど比較的把握が進んでいますが、有形文化財や埋蔵文化財に関してまとめられたものは少ないのが現状です。これは旧日生町が刊行した『日生町誌』にも同じ傾向が見て取れます。旧備前市に至っては自治体史が編纂された事はありません。平成17(2005)年以前に合併した旧伊部町・旧三石町・旧片上町で情報量にばらつきはあるものの、町誌・町史が編纂される等、一部の地域についてある程度文化資源の把握ができています。

文化施設では、冊子が刊行され、絵馬や井田など設定された企画展のテーマで文化資源の把握が進んでいる一方、仏像と石造物の分野は民間によって、悉皆的な調査が行われています。埋蔵文化財の把握に関しては備前焼の窯跡の発掘調査が行われ、報告書が発行される等、比較的充実しているといえます。その他、3市町合併の後、地域の公民館が文化資源についてまとめたものがあります。広域では、備前市・和気町・赤穂市の一部が属していた和気郡を対象とした地域誌が刊行されていますが、これは邑久郡に属していた東鶴山地区を含んでいません。全体に通史の記述が多く、各分野にわたる網羅的な記述にはなっていません。市全体で悉皆的な調査を終えているのは仏像調査や植物相の調査です。

未調査の分野に関しては、どのような調査が必要か的確に把握した課題をもとに、事業規模等を考慮しながら予算措置も勘案し、年次計画的に実施に移していく必要があります。そうすることで、備前市の歴史文化の特徴が具体的に今まで以上に明らかになっていきます。

【表 6-1】地区別の調査状況

旧地区	地区	時代区分	建造物	美術工芸品	無形文化財	民俗文化財	史跡	名勝	重要・補助・埋蔵記録	文化的景観	伝統的建造物群	文化財の保存技術	埋蔵文化財
旧備前市	東鶴山	先史	—	△	△	△	△	○	△	—	—	△	△
		古代	—	△			△						
		中世	未	△			△						
		近世	未	△			△						
		近現代	未	△			△						
	西鶴山	先史	—	△	△	△	△	○	△	—	—	△	△
		古代	—	△			△						
		中世	未	△			△						
		近世	未	△			△						
		近現代	未	△			△						
	香登	先史	—	△	△	△	△	—	△	未	△	△	△
		古代	—	△			△						
		中世	未	△			△						
		近世	未	△			△						
		近現代	未	△			△						
	伊部	先史	—	△	△	△	△	○	△	△	△	△	△
		古代	—	△			△						
		中世	△	△			△						
		近世	△	△			△						
		近現代	△	△			△						
片上	先史	—	△	△	△	△	○	△	—	—	△	△	
	古代	—	△			△							
	中世	△	△			△							
	近世	△	△			△							
	近現代	△	△			△							
伊里	先史	—	△	△	△	△	○	△	△	—	△	△	
	古代	—	△			△							
	中世	△	△			△							
	近世	△	△			△							
	近現代	△	△			△							
三石	先史	—	△	△	△	△	○	△	△	—	△	△	
	古代	—	△			△							
	中世	未	△			△							
	近世	未	△			△							
	近現代	△	△			△							
旧日生町	日生	先史	—	△	△	△	△	△	△	—	△	△	
		古代	—	△			△						
		中世	未	△			△						
		近世	未	△			△						
		近現代	未	△			△						
	寒河	先史	—	△	△	△	△	△	△	未	—	△	△
		古代	—	△			△						
		中世	未	△			△						
		近世	未	△			△						
		近現代	未	△			△						
旧吉永町	吉永	先史	—	△	△	△	△	○	△	△	—	△	△
		古代	—	△			△						
		中世	△	△			△						
		近世	△	△			△						
		近現代	未	△			△						

(凡例)

- おおむね調査ができています
- △ さらに調査が必要
- 該当なし
- 未 未調査

(2) 保存に係る現状と課題

文化資源を次世代に引き継ぐためには適切な管理、適時の修理を行う必要があります。近年、市指定の建造物で大規模修理が連続し、多額の補助金を交付しています。さらに毎年、指定文化財に草刈等の管理費用の補助や、防犯防災設備への補助も行っています。しかし、補助する行政側、管理する所有者側双方に負担が大きく、今後指定された建造物などの経年劣化にともなう維持管理に係る費用の増大も見込まれます。

保存修理のための補助金や調査経費は年々増加する傾向にあります。財政の枠も限られていますので、緊急性や優先度などを考慮して、整理する必要があります。10ケ年単位ぐらいで、事業内容や財政規律から重点的に取り組むものを検討していく必要もあります。

このように保存に関する補助制度はありますが、対象になる文化資源が有機的に関連付けられていないことから、指定文化財のみの限定的な保存しかできていないのが現状です。文化資源が持つ特徴を明らかにできていないものが多く、そのため効率的な保存の方法がとられていないのも一因です。指定された文化資源の維持管理費が年々増大していて、今後民間資金の導入など長いスパンでの計画が必要です。

これまであまり備前市内では大規模な史跡整備事業が行われていません。現在、備前陶器窯跡保存活用計画を策定済みですが、実際の整備は数年先からとなります。市域内において、国宝・国重文・特別史跡など複数の指定がかかる旧閑谷学校は、(財)特別史跡旧閑谷学校顕彰保存会が岡山県の指定管理者として適切な運営を行い、価値の保存を行っています。

(3) 活用に係る現状と課題

同様の機能を持つ文化施設が地域内に点在しているため、文化資源に関する効率的・効果的な活用が難しい状況にあります。そのため令和(2020)年に策定された施設再編計画に合わせて、拠点となる施設、そこを補完する施設に再編することが喫緊の課題です。

一方、日本遺産の構成資産である「延原家文書」をはじめ地域の歴史を語る重要な古文書類や歴史資料が未調査のまま散逸する恐れもあり、体系立てた調査が急務ともなっています。さらに、国指定史跡「備前陶器窯跡」に関しては、保存活用計画が策定されていますが、整備はこれからとなり整備費用の確保も課題となります。国指定史跡「丸山古墳」では、整備構想も未着手、公有化計画も現在ありません。今後は再編された文化施設からの情報発信を行いながら、事業着手の機運を高める必要があります。

閑谷学校、備前焼の里など訪れた人たちが長い時間備前市に滞留し、じっくりと備前市

の歴史文化に触れるように、いかに周遊ルートを整備し、拠点を形成するかも課題であり、今後観光部局とより緊密な連携が必要になってきます。

観光エリアでありながら空き家が増えている伊部地区などその対策は地域づくりとの関連もあり重要な問題となっています。平成 23(2011)年度創設された空き家情報バンク制度を活用しながら、芸術家の市外から招聘など制度の活用方法を検討していく必要があります。

また来訪者が気軽に備前市内を周遊したり、快適な滞在できるようユニバーサルデザインに基づく史跡や施設の整備、また統一したデザインによる案内表示板等の充実が必要となります。

(4) ひとつづくり・しくみに係る現状と課題

過疎化が進む地域、限界集落となっている地域では祭りや行事、生活文化の保存継承が危機に瀕し、すでに主催者や伝承者がいなくなることで消滅したものも多くあります。これら担い手不足により、伝統の技や知恵、活動が失われている状況にあります。このような状況に伴い、若者をはじめとする伝統文化や地域の成り立ちへの関心の低下が懸念されるなか、備前市の文化資源の価値や魅力を地域住民に理解してもらえるような備前歴史フォーラムや講座・講演会などの今まで以上の取り組みが今後必要となります。さらには、地域やまちの未来を担う子どもたちが文化資源に関心を持てるような郷土学習などのしくみづくりをどのように構築していくかも、課題となっています。一方で、熊沢蕃山、津田永忠など郷土ゆかりの人物、柴田錬三郎、藤原審爾、正宗白鳥など郷土出身の文学者に関して学んだり顕彰することによって、地域への愛着を深める機会とすることも大切です。

また、文化財行政を担っている教育委員会部局では、文化財専門職員(学芸員)、埋蔵文化財専門職員の適正な配置がなされていないため文化財全体を保存・活用していく取り組みを円滑に進めることができていないのが現状です。今後の計画的な職員配置による適正な体制づくりが必要となります。さらには専門職員が研修などを通してスキルアップすることは、適正な人材育成の一環として重要であり、体制維持の基盤となります。一方で文化資源を教育委員会部局だけの課題としてとらえるのではなく、庁内の観光、企画などの関連部局・NPO・備前市ボランティアガイド協会などの任意団体との連携も必要となってきます。

2 文化資源の保存・活用に関する方針

(1) 将来像

備前市内には旧閑谷学校、備前焼、瀬戸内海からの海産物、四季折々に美しい山々などがあり、豊かな歴史文化・自然に恵まれた地域です。それらは備前焼などの窯業をはじめ、現代の生活の中で脈々と息づいています。地域の特色を構成するこれら文化資源を、広い視点に立ち第3次総合計画・第2期総合戦略、教育に関する大綱など関連施策と調整をはかりながら、次世代へ引継いでいくことが重要です。文化資源を地域の宝として大切に思う人づくりを永続的に進めることで、郷土に対する愛着が高まり、心豊かにいつまでも住み続けたいまちになるものと考えます。

豊かな歴史文化、自然は、地域の魅力であり、多くの来訪者・観光客を引きつける資源です。それは地域経済へも影響を与えます。来訪者視点で地域の人々が新たな魅力作りをじっくり行うことが大切です。魅力的な情報発信を行い、多くの人々が来訪し、新たな交流が生まれることが、地域づくり、まちづくりの起点になります。

各地域では、ご当地グルメであるカキオコや、日本遺産に認定された近世日本の教育遺産群の構成資産である井田跡で栽培された井田米を使用し、備前市里海・里山ブランド「みんなでびぜん」として認定された日本酒「備前井田」を顕著な例として、観光資源、まちづくりのきっかけとして活用していく取組みも盛んです。これら文化資源は、長い時間をかけて形成されたもので、地域の個性とも言えます。そうしたことを踏まえ、備前市の文化資源の保存と活用に関する将来像として、「地域の文化資源を活用し、地域につながりを取り戻し、郷土に対する愛着を高め、未来のまちづくりへつなげる」とし、「ふるさとは備前です」と言えば、世界中の人が相槌を打つようなまちを目指します。



学びの原郷「閑谷学校」



800 有余年続く「備前焼」

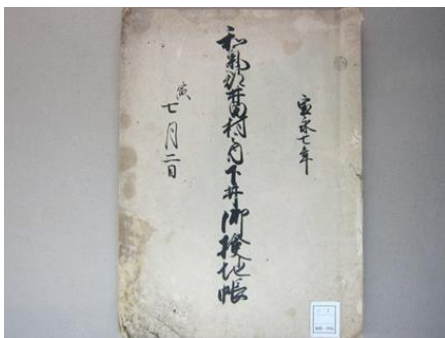


豊かな海産物「五味の市」

(2) 基本方針

① 調査・把握に係る基本方針

備前市には未指定の文化財が多く存在しており、今後は産業遺産を含む歴史的建造物の総合的調査、仏画・肖像画の調査、古文書の調査、植生の最新状況の把握調査、民俗調査など各分野の悉皆的調査と、井田跡、熊山山塊の戒壇、備前焼陶工・窯元、備前焼宮獅子、耐火物など地域やテーマに基づいた総合的な調査による文化資源の把握が急務です。こうした取り組みにより備前市の特徴的な歴史文化を明らかにしていきま。あわせて、調査が終了した分野に関しても成果物等の定期的な情報の更新が必要です。



備前国和気郡井田村延原家文書

② 保存に係る基本方針

文化資源の保存管理を適切に行うためには、それらが継続的に営々に行われることが大切であり、年次的で計画的な修理を行う必要があります。そのため、民間資金も含めて様々な補助制度・助成制度を有効に使いながら、地域の人々とも連携して長期的で効果的な保存や整備を文化資源に対して行っていきます。

文化資源をとりまく周辺環境を含めた一体的な保存管理のための環境整備等に取り組み、文化資源の状況等を継続的にモニタリングする体制を整備していきます。

③ 活用に係る基本方針

国史跡備前陶器窯跡など拠点となる史跡や施設の整備の検討を行い、空き家情報バンクのデータも活用しながら、地域の人々が地域の歴史文化を体感できるような場を創出します。その場では、地域の人々が主体的、継続的に、文化資源の保存と活用に取り組んでいきます。これまでの様々な分野にわたる調査成果やこれから行う調査の結果を情報発信し、備前市の歴史文化の特徴が多くの人に届くようにします。情報発信の強化、様々な媒体を

使ったメディアの多様化を目指し、備前市の歴史文化に関する情報が的確に利用したい人に届くようにします。そして発信された内容が単体であるのではなく、ほかの分野と関係して備前市の歴史文化の特徴を作り出していることが届くよう各事業が有機的関係を持った取り組みになるようにします。さらには、有機的関連性を持たせた文化資源をめぐる周遊ルートを設定するなど、その内容の情報発信を行ってきます。

③ ひとづくり・しくみに係る基本方針

備前市の文化資源を自然に大切に思える人をふやすために、魅力発信のイベント、各地域での文化資源をテーマにしたワークショップの開催、学校教育における郷土学習など、それが永続する仕組みをつくりまします。一方、文化資源の保存・活用のための体制整備として文化財専門職員の適正な配置や庁内の横断的な連携体制を整えます。そのために、専門職員の計画的な採用、適正な人材育成を行っていきます。

これまで保存・活用を担ってきた地域や団体等のコミュニティとしての活力を保ち、その活性化を促すため、地域及び各種団体間のネットワークづくりや活動への支援充実に取り組まします。

また、子どもたちが歴史文化に触れる機会を増やし、学校教育等様々な場を通じた担い手育成に取り組まします。



論語かるた伊里中学校かるた大会の様子

3 関連文化財群の保存活用に関する課題と方針

本項では、関連文化財群ごとの課題及び方針を記述します。

(1) 学びの原郷閑谷学校と岡山藩主池田家の遺産

旧閑谷学校の重要文化財の建物は、経年劣化に対応するための維持・修理の負荷が年々大きくなっています。近年は特別史跡地内のどこかの建物で修理工事が実施されています。特別史跡旧閑谷学校保存管理計画に基づく業務のうち、旧閑谷学校への理解を深めてもらうための施策や講演会やシンポジウムなどを行いその価値の周知など、岡山県と連携しながら行っていきます。一方、旧閑谷学校の価値をより広く伝えるために情報発信のもととなる「コミュニティ」「人材育成」などをテーマとした戦略の検討を、備前市・近世史の専門家・備前市ボランティアガイド協会などの団体・市民が連携しながら行っていきます。熊沢蕃山の顕彰事業やそれに関する生涯学習施設の整備等の検討を令和 5(2023)年度を目途に備前市熊沢蕃山顕彰推進委員会・熊沢蕃山マンガ製作活用検討委員会等で行っていきます。井田跡の開発に伴う確認調査、歴史資料調査、環境調査など総合的な調査のとりまとめを令和 6(2024)年度を目途に、備前市教育委員会で行っていきます。

(2) 備前焼を生み、栄えるまち

課題は、やきもの業界全体が不振のなかで、備前焼も不振が続いていること、窯場がある伊部地区の面的な観光、長時間滞在できるまちになっていないこと、地域の成り立ちや関連史跡への関心が希薄であることなどがあげられます。

備前市が専門家の指導を受けながら史跡伊部南大窯跡整備基本構想に基づく保存活用計画の実施、史跡整備に向けた調査を令和 7(2025)年度を目途に実施していきます。行政と専門家からなる実行委員会で備前地域の歴史の情報発信のための備前歴史フォーラムの開催を継続していきます。行政が平成 30(2018)年度から実施している中世備前焼総合調査事業の成果を、令和 3(2021)年度中にまとめ、保護すべき窯跡群の位置づけなど次の段階の事業に生かしていきます。備前市教育委員会の学芸員と近世史の専門家で関連団体の協力を得ながら近代以降の備前焼陶工・窯元の調査・現代作家の活動状況の把握を令和 9(2027)年度を目途に実施していきます。備前市教育委員会の学芸員と専門家で無銘の備前焼宮獅子の実態把握調査を令和 5(2023)年度を目途に実施していきます。

竹筆、ろう石加工技術など未指定伝統技術の実態把握調査を備前市教育委員会が主体となり令和 10(2028)年度から令和 12(2030)年度の間実施します。

(3) 近代漁業発祥のまちと食文化

近代漁業のあらましなど、漁業のまちとして栄えた日生地区の歴史や産業をテーマにした常設展示を加子浦歴史文化館で行っていますが、備前市内の各地域における食文化の違いなどの悉皆的な調査はできていません。平成30(2018)年には古くから漁業で栄えてきた日生地区の食文化をテーマに加子浦歴史文化館で企画展を行いました。この展示を通してみえてきたことは、長い年月を経て市内各地域の伝統的な行事や作法と結びついた食文化が、どのように形成されたのか、また代々受け継いできた食文化が失われないための方策が必要ということです。

今後、備前市が関連団体や市民の協力を得ながら、加子浦歴史文化館など文化施設での情報発信を営々と行っていき、食文化をテーマにしたワークショップの開催や調査研究の深化を図っていきます。また、備前市の文化資源の商品化やそれをテーマにした企画に対する支援方法を備前市が検討するとともに、農林水産部局と連携をとりながら関連団体が中心になって実施していきます。

(4) 中世山岳仏教の栄華とふるさと村の景観

ふるさと村の景観維持のための費用の負荷がかかりますが、管理する分母となる人口が限界集落に近い状態です。また、調査研究の進展がなく、この地域の本質的価値の情報発信がしにくいという側面があります。

県内大学の中世史の専門家の指導を受けながら備前市教育委員会が八塔寺の歴史の調査・研究の深化と調査方法の検討、成果の発信を行っていきます。これらの成果をもとに、備前市教育委員会・関連団体が中心となり「ふるさと村」の情報発信を行っていきます。専門家の助言を受けながら、備前市が景勝地・動物・植物・地質鉱物等の把握調査を行っていきます。

(5) 耐火煉瓦産業で日本の近代化を支えたまち

近代化遺産の本質的価値の情報発信とその組織、資産の管理者と保護の関連で課題があります。

近代窯業史の専門家の指導、備前市セラミックスセンターなど関連機関の助言を受けながら、備前市が耐火煉瓦産業に関する悉皆調査や備前市近代化遺産の保存方法の検討をしていきます。関連団体が大人の工場見学会(耐火煉瓦やクレイ工業)の実施を検討します。備前市教育委員会が、近代の建造物の専門家の指導を受けながら三石小学校講堂など、文

化資源の拠点となる構成資産の整備方法の検討をします。

(6) 映画と文学、「心象風景」の残るふるさと

拠点的な情報発信の場所がなく、市民の意識もそこまで醸成されていないのが課題です。

備前市が関連団体の協力を得ながら備前ゆかりの文学者等の情報発信方法の検討をしていきます。関連団体が、映画ロケ地巡りツアーの実施とロケ地候補の検討をしていきます。市民・関連団体が素材「備前市」の積極的活用を検討していきます。備前市の各文化施設が、近代文学史などの専門家の助言を受けながら文学者など備前ゆかりの人物など顕彰事業(企画展など)を実施していきます。

(7) 交流、流通の要となった地

顕著な資産がありながら、体系立てて、歴史文化の文脈に乗せて情報発信ができていない点、本質的価値が丁寧に抽出できず情報発信に至っていないという点が課題です。

近世・近代の交通史、流通史の専門家の指導を受けながら、備前市教育委員会が「交通・流通」をテーマとした調査研究の深化をはかります。関係団体・専門家の協力を受けながら備前市が「交通・流通」をテーマとしたワークショップの開催をしていきます。考古学・保存科学の専門家の助言を受けながら備前市教育委員会が丸山古墳の価値の明確化に向けた手法の検討・認知度の向上をはかっていきます。備前市教育委員会埋蔵文化財専門職員が、考古学の専門家の助言を受けながら備前市内にある遺跡のさらなる価値の明確化に向けた調査の実施をしていきます。関連団体、備前市が令和6(2024)年度から令和12(2030)年度にかけて、古民家のまちづくりへの活用を検討していきます。令和5(2023)年度の取りまとめを目途に備前民俗調査委員会など専門家の指導を受けながら備前市教育委員会が祭り、年中行事などを対象とした総合的な民俗文化財調査の実施をしていきます。備前市がユニバーサルデザインに配慮した総合的なガイダンス方法(案内表示など)の検討と実施をしていきます。